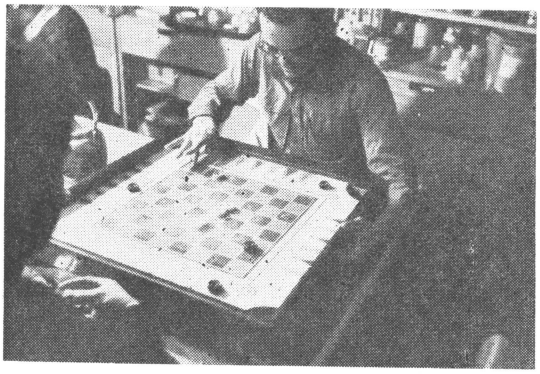
地方だより

南極昭和基地

清野善兵衛

今年の1月1日，南極昭和基地ではアンテナ・ポールに国旗を掲げて元旦を祝い，夏酣の基地の風物をのんびり楽しんでいた．宗谷はすでに氷海に突入し遅くはあるがしかし確実に基地に接近していた．過去の例よりすれば交代は早くて1月の下旬だろうと，たかをくくっていたわれわれは翌1月2日ヘリコプター第1便が宗谷を発進したと云う無線電話を受けて大いに慌てた．

基地にいたわれわれがノンビリしていた理由は，昨年の冬は第1次越冬の時に較べて気温が低く，従って海氷はかなり北の方まで張出しているだろうと予想され，また今までの経験からビセットを避けるために慎重な偵察の後，海氷の後退を待って突入を開始するだろうと考えていたことにある．この思惑は見事に外れ宗谷は正月の休みもなく突入を開始したのである．後に宗谷気象班に聞いたところではこの数日前からルッツオホルム湾の外では珍しく西ないし南風が吹いており海氷はゆるみ，外洋に散っており，突入には絶好の機会であったとのことである．オビ号との協同作戦という利点があったことはたしかであるが，しかし，ほとんど独力で基地より約40マイルの地点まで接近，空輸を開始した．距離が近いので空輸は大いに能率があがり数日の間に越冬を可能にする決定的な物質の空輸を完了し，さらに雪上車による氷上片途輸送という付録までついて意気大いに上った．そして宗谷は，いかなる船でもビセットを余儀なくされるような低気圧の来襲の時には鮮かに外洋に逃げ出しており悠々と天気待ちをしていた．好天が予想されれば機を失せず突入空輸，荒天が予想されれば外洋に待避，このようなことが二度三度繰返され，遂に150数トンの空輸に成功した．

今年ほど天気予報が空輸作戦に利用されたことはないだろう．また事実うまく行ったと思う．南極空輸作戦の一つの原則を作ったと考えているが，今後はさらに高い精度の予報を要求されるだろうからそれに応じられるようにわれわれ当事者も勉強せねばなるまい．